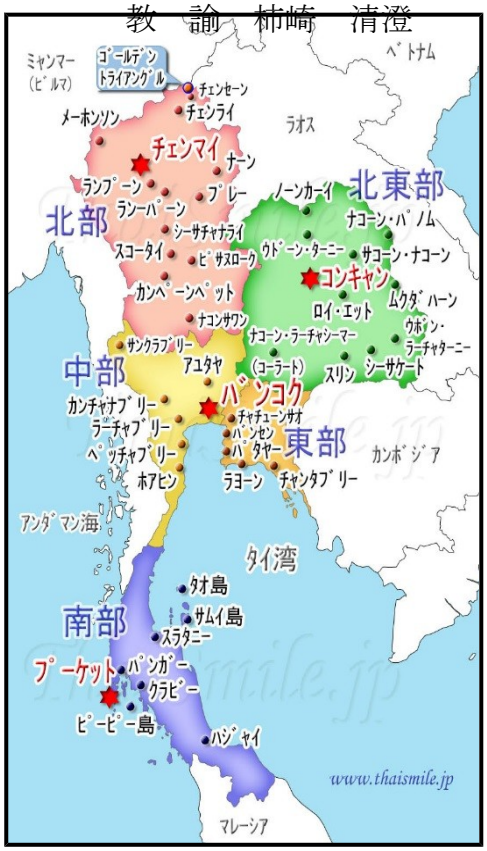
タイ国　派遣期間 2015 年 4 月～2018 年 3 月

1．タイ国について

美瑛町立美瑛小学校
教　諭　柿崎　清澄

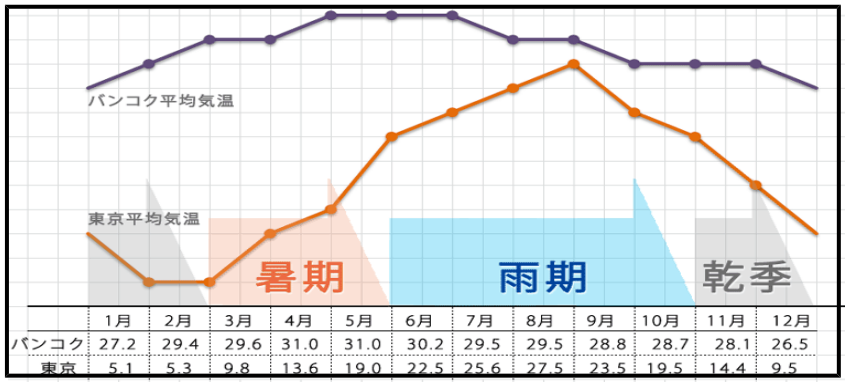
1．タイについて



○タイの国土と気候と文化

タイ王国は、インドシナ半島のほぼ中央に位置し、陸ではマレーシア、ミャンマー、ラオス、カンボジアの 4 カ国に囲まれ、海岸線ではタイ湾（シャム湾）とアンダマン海に面している。国土面積は 51 万 4 千ｋｍ^{2}で、日本のおよそ、1.4 倍の広さがある。タイ国内は、一般的に「北部」「東北部」「中部」「南部」に分けられ、各地域の特色は下記の通り。

北部	古都チェンマイを中心に、灌漑設備の整った稲作が盛んに行われている。山岳民族の村がある。
東北部	ラオスとの国境地域で「イサーン」とも呼ばれる。干ばつや洪水等の被害が多く、最も貧しい地域。
中部	チャオプラヤー川流域を中心とする肥沃な穀倉地帯。首都バンコクは政治経済の中心地。
南部	マレー半島部で、観光地で有名なプーケットやサムイなどの島々が点在している。



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
バンコク	27.2	29.4	29.6	31.0	31.0	30.2	29.5	29.5	28.8	28.7	28.1	26.5
東京	5.1	5.3	9.8	13.6	19.0	22.5	25.6	27.5	23.5	19.5	14.4	9.5

タイの気候は熱帯モンスーン気候に属し、一年が雨季と乾季に分かれている。更に乾季は暑季と寒季に分けられ、変換平均気温は 28℃前後。総人口は、約 67 万人でその 95％が仏教徒である。国中の至る場所に寺（ワット）があり、毎朝、黄衣をまとった僧侶に食べ物や花を捧げ

る人々の姿が見られる。タンブンと呼ばれるこの行為を積み重ねることで、功徳を積むことができると信じられている。

○タイの国技（ムエタイ）

ムエタイは格闘技の一種で、発祥地・タイでは国技に指定されている。立ち技世界最強とも名高いムエタイの選手はナックモエと呼ばれ、両手、両肘、両脚、両膝の８箇所を用いて相手と戦う。試合前に行う名物のワイクルーは自分の師と両親に感謝を捧げ、神に勝利を願う意味があると言われている。試合形式はラウンド制。1ラウンドを3分間とし、ラウンド間に2分間のインターバルをおく。通常５ラウンド行うが、プロとアマチュアでは若干形式が異なる。1990年代末には、これまでリングに上がることを許されなかった女性にムエタイを行うことが認められ、少しずつ女子ムエタイが行われるようになっているが、まだオリンピック競技には指定されていない。また、ムエタイのタイ社会的ステータスがあまり高くないのは、競技自体が賭博の対象となり、貧困層のスポーツとして見なされていることである。実際、タイの２大競技場とされるラチャダムナンスタジアム（１９４１年建設）と、ルンピニースタジアム（１９５６年建設）でも多くの観客が選手の様子や調子を見てどちらに賭けるかを決めていた。

○ムエタイの歴史（古式ムエタイ）

ムエタイの歴史は古い。はっきりとした興りは不明だが、その起源は14～18世紀のアユタヤ時代にまで遡る。当時のタイは常に隣国のミャンマーによる侵略の脅威にさらされており、素手で敵兵を倒す手段として編み出されたのがムエタイの始まりだったとされている。競技として確立されるまでは、「古式ムエタイ」として戦争の際の戦闘術と関わり合いながら発展を遂げてきた。

○ムエタイを実際に習う

バンコク都内には、ムエタイのジムがいくつも点在し、女性にも人気が高い。ジムにはトレーナーが数名いて目的や体力等に応じ練習内容を考えてくれる。3分間のミット打ちは非常に運動力が高く健康増進・ストレス解消にもつながる。また、単にパンチやキックといっても、ジャブやフック、ローキックやミドルキックがあり、これに肘や膝を組み合わせることで攻撃のバリエーションが多彩になる。更に、組み合う際には首相撲という戦い方もあり、国技の奥深さを実践の中で体験することができる。

レッスンにかかる費用は事務の設備によっても変わってくるが、およそ 300～500 バーツに設定されている。

K－1 WORLDMAX の 2004 年 2006 年のチャンピョンとなった、ブアカーオ・バンチャメークも現在、タイ国内でトレーニングジムを経営している。CM や映画にも出演するタイの英雄、ブアカーオの存在は年齢や性別、国籍を超え、今も多くの人々にムエタイの魅力を伝えている。

○ムエタイ観戦

タイ国内では、ムエタイの試合中継を行っているテレビ局が多く、週末はテレビを通じてムエタイ観戦に興じる国民の姿を目にすることがある。

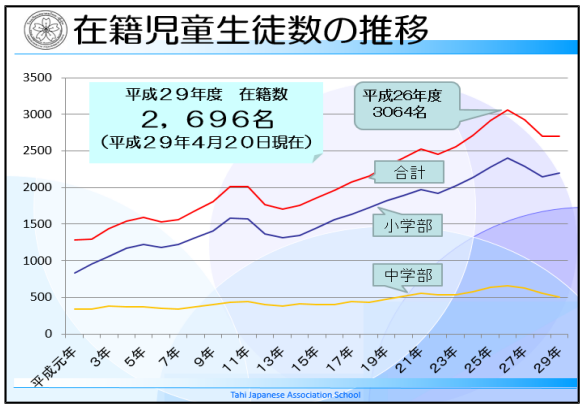
2017 年からスタートしたテレビ番組「MUAY EXTREME」は、タイ人選手 VS 外国人選手というコンセプトで試合が行われる人気番組。

スタジオまで足を運べば、実際にリングサイドで観戦をすることもでき、放送日となる毎週金曜日は、多くの人たちが会場を埋め尽くし、リング上で戦う選手たちに檄を飛ばしている。

2. バンコク日本人学校について

○泰日協会学校（バンコク日本人学校）

バンコク日本人学校は、大正 15 年(1926 年)創立の盤谷日本尋常小学校を前身とする、世界一歴史のある学校である。戦争のため一時閉校となるが、昭和 31 年(1956 年)にサラディーンの日本国大使館内に「在タイ日本国大使館附属日本語講習会」として 28 人の子どもたちと 4 名の教師により改めて開設される。その後、泰日協会の協力を得て、昭和 49 年(1974 年)に現在の「泰日協会学校（バンコク日本人学校）」としてタイ国政府から正式に義務教育学校として認可を受け、戦後初の日本人学校として開校される。増加する在籍児童生徒数は、2014 年（平成 26）に増加のピークを越えるが（右図参照）現在（平成 30 年度）もなお児童生徒数 2631 名、教職員 229 名と世界一の規模を誇る日本人学校である。



在籍状況

		29年度	
	学年	学級数	在籍数
小学部	1年	14	425
	2年	12	416
	3年	12	415
	4年	10	326
	5年	10	314
	6年	10	298
	特支学級	3	16
	計	68	2194
中学部	1年	6	182
	2年	6	172
	3年	4	148
	計	16	502
	合計	84	2696

○異なる環境での学校生活

バンコクは世界有数の渋滞都市で、交通事故も多いことから学校は教職員の運転を認めておらず、児童生徒も含め9割は通勤通学にバスを利用している。渋滞を避けるため早朝6時頃から、およそ200台のバスが都内に点在する各マンションを回って児童生徒を集めるが、学校へ到着するのは7時半頃。下校時は、児童生徒を自宅まで送迎するバスが駐車場を埋め尽くす。

また、学校には給食を作る設備がなく、衛生面から水道水も飲めないため、弁当と水筒の持参は必須。エアコンで教室の温度を27℃程度に保ち、昼食時間まで教室で弁当の保管をする。気候や文化だけでなく大規模ならではの学校事情も非常に特殊で、校内組織や校務分掌も多岐にわたる。教務部長をはじめとする9名の部長職にあたる教員は授業を持たず管理業務に従事し、各学年には学年主任を配置し学年業務を進めていく。会議も多く、赴任してからの数ヶ月間は深夜まで仕事をする日が続き、中には体調を崩してしまう同僚もいた。日本と変わらないのは、児童生徒の明るい笑顔と熱心な学習姿勢。初年度は1年11組の担任を務め、教室で児童と学習を進めているときが一番落ち着く時間に感じた。

○日泰交流授業研究会

平成29年より、バンコク日本人学校を拠点に、日本型教師教育の進め方について、タイ現地校と研究を進めてきた。これは、海外の目を通して日本の教育を客観的に見つめ直す機会となっただけでなく、タイ現地校の教師の協働システム構築の一助を担うことにもつながった。国立大学法人東京学芸大学の藤井名誉教授に示唆をいただきながら、算数科を窓口として実施した2本の研究授業・研究協議はとても有意義な研修の時間となった。

今後、更にこの活動を広げていくことは、日泰両国の教育水準を高めていくきっかけとなるだけでなく、より一層交流を深めることにつながると強く感じる。

○校外学習

学校の中では、つい外国にいることを忘れてしまいそうになるが、一歩校外に出れば日本とは全く異なる環境が広がっている。そんな

小学	1年生	「サファリワールド」「ラマ9世公園」
	2年生	「ドゥシット動物園」「乗り物学習(BTS,MRT)」
	3年生	「味の素工場」「MAXVALU」
	4年生	「バンケン浄水場」「科学館ノテネタリウム」
	5年生	「トヨタ自動車工場」「ホアヒン海浜学校」
	6年生	「ラオス・タイ修学旅行」
中	1年生	「アユタヤ遺跡」
	2年生	「シンガポール修学旅行」

中、バンコク日本人学校では海外の特性を生かし、学年の実態に応じた校外学習を実施している。小学部第３学年では、タイ国内に工場やマーケットを持つ「味の素工場」や「MAXVALU」の見学を行う。バンコク都内から車で２時間ほどの場所にある味の素ノンケー工場には日本人スタッフも多く常駐し、見学に訪れる児童たちを丁寧に説明しながら商品ができるまでの加工ラインを案内してくれる。約７万人の日本人が住むタイ国内では、日本製品の需要が非常に高く、児童は見学を通して流通の仕組みだけでなく、多くの日本企業が集まる理由についても理解することができた。

専門性を生かした指導と音楽朝会

日本人学校小学部は専科教員による専門性を生かした授業で子どもたちの興味関心を高める取り組みを進めている。その一環として行っているのが、全校児童による音楽朝会である。学年に一人ずつ配置される音楽専科教員が中心となって課題曲の指導を行い、月に一度、校内の中庭で全校合唱を行う。2000 人を超える大合唱からは言葉にできない迫力と感動が伝わってくる。音楽科の他には図画工作科、理科、家庭科、外国語の専科教員を各学年に配置するなど、200 名を超える教職員体制の利点を生かした取組みを行うことで、児童の学力向上を図っている。

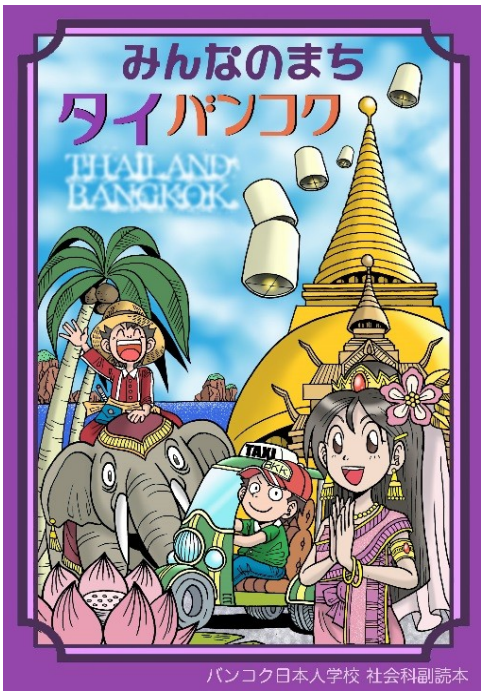
タイ語の授業と日本語教室

タイの私立学校としての認可を受けているバンコク日本人学校では、週に１時間のタイ語の授業が義務付けられている。日本語が話せるタイ人教師が指導に当たり、簡単な単語を使ったタイ語会話を中心に学習を進める。

文字の読み書きは行わず、タイ語に親しむことに重点を置き、児童は学んだタイ語を現地校との交流学習をはじめ、海外生活の中で活用していく。また、バンコク日本人学校の中には、タイ人と日本人のハーフの児童も在籍していることから、小学校第１学年と第２学年には日本語指導の教室を設け、日本語理解に難しさを感じている児童に対し、週１～２時間の日本語指導を行っている。

○社会化副読本の改訂作業

2017年に、バンコク日本人学校の３・４年生が使用する社会化副読本の改訂作業が行われ、４年ぶりに内容が更新された。改訂作業に当たっては前述の「味の素工場」や「MAXVALU」の他に、現地のバンケン浄水場や国立博物館などからも情報提供を依頼し、本校の編集員を中心に内容の検討や編集作業を行った。私も編集委員会に所属し副読本の表紙や挿絵を担当させてもらった。在外教育施設ならではの情報が詰まった新版社会化副読本は2018年より児童に配布され日々の学習の中で活用されている。



バンコク日本人学校 社会科副読本

3．日本文化を通した交流

○職員研修（2015年８月６日～８月８日）

2015年８月６日～８日にかけて、タイ北東部の現地校ラートヌロク学校とカルラートラングサン学校に赴き教育実践を行った。物資が十分にそろっていないことが多い現地校の教室の雰囲気は日本とは大きく異なり、もちろんテレビもない。授業づくりは同僚とチームを組み、日本の文化に親しんでもらうことをコンセプトに入念な準備を進めがた、やはり覚えたてのタイ語を使っての教育実践は非常に大変で言葉の壁の厚さを痛感した。

授業は低学年を対象に、紙で作った桜や銀杏、紅葉に思い思いの色を乗せ、大きな紙の着物を彩るコサージュ作りを行った。フラッシュカード等を用いて視覚的な理解を促したり、体験的な活動を取り入れたりすることによって子どもたちも笑顔を交えながら学習を進める様子が見受けられた。また、実際に着物を着てもらったり、空手の体験を取り入れたりしたことも好評で、現地の先生方は興味深そうだった。もっとタイ語を話すことができたらと反省点も多く残ったが、現地校の素直な子どもたちや熱心な先生方に触れ有意義な時間を過ごすことができた。

交流学習（2015年９月10日）

バンコク日本人学校では、毎年都内の小学校と児童同士の国際交流を行っている。２０１５年もカセサート大学付属小学校の児童を学校に招き交流学習を行った。実施に当たっては本校

に勤務するタイ語教師にも協力を仰ぎながら児童と共に入念な準備を進める。当日は、ロイクラトンの踊りを一緒に踊ったり、折り紙遊びや言葉遊びを行ったりと、活動中心の学習の中で子どもたちは少しずつ互いの距離を縮め、国境を越えて交流を図る様子が見受けられた。

覚えたてのタイ語を自信たっぷりに話す日本の子どもと、それに笑顔で応えるタイの子どもたち。その順応性の高さに脱帽すると共に、きっと将来日本とタイの架け橋になる大人へと成長していくのだろうと期待に胸が膨らんだ。

チェンマイ補習授業校巡回指導（2016年12月23日～12月25日）

タイにはバンコク日本人学校の他に、シラチャ日本人学校と、チェンマイ補習授業校、プーケット補習授業校と邦人子女を対象とする教育施設が３校ある。補習授業校は毎週土曜日のみ開校しており、勤務する職員は多くが現地で採用された日本人。文部科学省から派遣される教員とは異なり豊富な教職経験を持っていないことから、物資や施設が十分でない教育環境の中での学習指導に苦労を強いられている部分もある。

バンコク日本人学校では、指導者の授業力と児童生徒の学習意欲向上を目的に夏と冬に年２回の巡回指導を行っており、私も2016年の冬季に巡回指導に参加してきた。１年生から中学３年生まで在籍する80名（2016年12月現在）の児童生徒は、普段はタイの現地校やインターナショナルスクールに通っており、日常生活の中で日本語を使うことも少ない。日本語習得率も個人差が多く、学習では文字が読めずに理解に時間を要する場面も多く見られたが、学習に向かう児童生徒の姿はいつも真剣であった。古都チェンマイの赴きある町並みの中にある補習授業校の熱心な先生方や児童生徒との触れ合いや授業実践は大変有意義な研修となった。今後もバンコク日本人学校と連携しながら教育水準の向上を図っていけたらと強く感じる。

4. タイでの生活

語学研修

３年目の夏期休業が始まる８月下旬よりタイ語の学習に取り組み，日常的な会話から文字の読み書きまで基礎的な部分を学び，平成 29 年 11 月 5 日，バンコクのダラカーム校で開催される実用タイ語検定４級を受験した。会場には老若男女，多くの日本人が集まっており，能力に応じて５級，４級，３級の試験を受けていた。４級取得後，更に学びを深めるため，バンコク日本人学校で勤務しているタイスタッフや警備員の方たちと積極的にコミュニケーションを図ったことは，タイ語の読み書きの定着につながっただけでなく，学校の業務推進にも役立った。

実用タイ語検定試験認定書

ประกาศนียบัตรการสอบวัดระดับความสามารถภาษาไทย

Certificate of Practical Thai Language Proficiency

4級

氏名　柿崎　清澄

Name　KAKIZAKI KIYOSUMI

受験地　バンコク

上記の者は日本タイ語検定協会主催の実用タイ語検定試験において4級に合格したことを証明します。　2017年11月25日

ทางสมาคมสอบวัดระดับความสามารถภาษาไทยออกประกาศนียบัตรฉบับนี้ให้ไว้เพื่อแสดงว่าบุคคลที่มีชื่อข้างต้นได้สอบผ่านการวัดระดับภาษาไทยระดับที่ ๔

วันที่ ๒๕ พฤศจิกายน ๒๕๖๐

This is to certify that the person named above has passed Level 4 of the Practical Thai Language Proficiency Test, administered by the Association for Thai Language Certification, Japan

25 November, 2017

日本タイ語検定協会　理事長　大川吉郎

President　Okawa Yoshiro

Association for Thai Language Certification, Japan

タイ人との触れ合い

前述のように、ある程度の語学力を身につけたことは、日常生活の中でも、できることの幅を広げてくれた。タクシーに乗ったり買い物をしたりするのはもちろん、バンコク都を離れて、タイ国内を旅行する際にも、各地域のタイ人とコミュニケーションを図る中で、深くタイの文化に触れることができた。

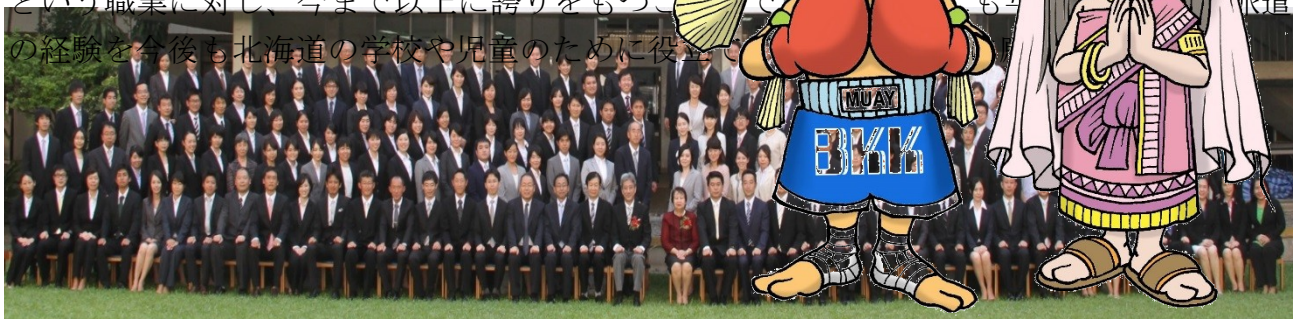
ドライバーと釣堀で大物を釣り上げる

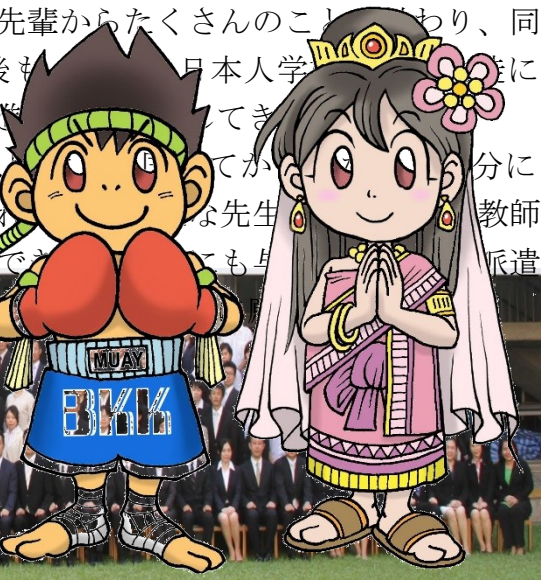
専属のドライバーとしてお世話をしてくださったタイ人の方とは日常会話を通じて仲良くなることができ、今でも電話で互いの近況報告をしている。その他にも、ムエタイジムのトレーナーや自宅の掃除をしてくださったお手伝いの方、タイ語家庭教師の先生など、多くのタイ人からたくさんのことを学び、様々な価値観に触れることができた。微笑みの国タイでお世話になった恩を何かの形で返すことができたらと強く感じている。

終わりに

北海道での教職経験をどれだけ在外教育施設での勤務に活かすことができるのか、着任前は不安な気持ちも大きかったが、学級経営や学習指導など、積み重ねてきた努力がそのまま役立ったと感じている。バンコク日本人学校の先輩からたくさんのこと[illegible]わり、同僚と悩みを分かち合いながら教育活動を進め、今後も[illegible]日本人学[illegible]にとってよりよい学校として発展していくように、後進[illegible]てき[illegible]

３年間の派遣期間でつくることができた貴重な人[illegible]てか[illegible]分にとって強い心の支えとなっている。全国から派遣さ[illegible]な先生[illegible]教師という職業に対し、今まで以上に誇りをもつこ[illegible]でき[illegible]も[illegible]派遣の経験を今後も北海道の学校や児童のために役立て[illegible]





コープクン　クラップ

ขอบคุณ ครับ

ありがとうございました。